

日英文化比較： 語彙スキーマのネットワーク

水野光晴

はじめに

過去半世紀足らずの間、言語学分野では生成文法理論と認知言語理論が両極となって、言語現象の解明に取り組んで来た。すなわち、前者は言語の形式的側面に焦点を当てて、個別言語の多様性の背後に人間言語の普遍性を追求する立場を理論的に展開して来た。他方、認知言語理論は、言語行動が人間の感性的、身体的経験と深く絡み合っており、とりわけ、ことばの意味は、具体的な経験によってつくられるイメージによる心的実態であるとする立場から、言語現象を動的に捉える言語学の新しいアプローチとして発展してきた。本論は、これらの研究で蓄積された豊富な知見を援用して英語の基本述語の意味用法に新たな光をあてる試論である。

ホモサピエンスを他のすべての動物から区別するものは、ことばという高度に複雑なシステムを使う能力である。そのことばを組み立てている単位は単語であり、人間の文化の基盤となっている。また、読みのプロセスの決定的な構成要素も、単語を再認することに他ならない。すべての単語には音声、意味、文法という三つの側面がある。なかでも、「単語の意味を知っているということは、それを慣用的に使用できるということである」(L. Wittgenstein, 1951)。したがって、ことばは文化と切っても切れないほど密接な関係にある。一般に、外国人の話し言葉には、母語話者にはない形式的な逸脱が見られるが、その「会話における言語使用を支配している社会的慣習に十分な配慮がなされたなら、その逸脱は雲散霧消する」(H. P. Grice, 1967)であろうとさえ言われる。

英単語の場合を例にとると、稀にしか用いられ

ないロングワード (long word) の意味はごく限られているが、日常生活で多用されるありふれた単語の多くは多義語である。それはその民族特有の歴史的背景と、その民族固有の社会・心理的あるいは文化的な経験が濃密に反映されているため、形式上はショートワード (short word) であっても、その意味は却って複雑である。したがって、その言語の母語話者はさしてその用法に困難を感じないとしても、そのような文化的背景の知識をもたない文化圏外の学習者が、それらの語を自由自在に正しく使いこなすことは至難の業である。なかでも、英語の動詞は、平叙-疑問、肯定-否定、能動-受動に12時制の変化形を考慮すれば、絶えず96通りのバリエーションが要求されるため、その学習者のストレスは、さらに倍加されること必定である。

I. A. リチャーズと共に大著「意味の意味」を著したC. K. オグデン (1935) は、「Basic English」において、英語から抜きだした国際補助語を提案したが、その中で語彙を覚える際の対立の重要性に着目した。彼は、基本語彙のリスト850語の約20パーセントが反義語の対となるものであり、これによって大幅に英語の学習時間を節約できると述べている。また、彼は英文の構造の中で最も学習者に負担となる述語を、基本動詞16語と方位語約30語に限定し、これらの語を組合せることによって約2000以上の動詞に匹敵する表現が可能になると述べている。本稿ではこれらの基本述語の意味について、認知心理学的に再解釈を施し、対立・類似している語彙相互の相違点を明らかにするように努めた。

ところで、英語の母語話者の脳内におそらく存在していると思われるそれぞれの語の認知的な意

味構造を表わす包括的なイメージを語彙スキーマ (Lexical Schema) と呼ぶ。この語彙スキーマは、各語彙の標識となるものである。一般に、語彙変化においては、何らかの新たな指示物に対する用語が必要になると、その指示物と関連がある既存のよく目立つ指示物を表す語句の意味 (原義) が拡張されることによって、その新しい指示物を指すようになる。このような過程を繰り返して英語の多義語は、今日見られる意味のネットワークを形成するようになったものと考えられる。

ここで、英単語の 'board' を例に『オックスフォード英語辞典』(Oxford English Dictionary) によってこれを検討してみよう。名詞 'board' の原義は「のこぎりで薄く切つてある表面の広い一片の材木」であった。ところが、これらの材木が食事や作業に役立つ平面となるようになると、'board' は、'table' (テーブル) としてよく知られる概念を表すように拡張された。さらに、'aboveboard' (トランプをする際に不正をしないように 'board' の上に手を出しておかなければならないことから、「正々堂々と」、「ありのままに」の意味)、'sideboard' (食器棚)、'bed and board' (宿泊と食事) のような表現もこの用法から派生した。やがて、この語は会議が開かれるテーブルの意味に拡張され、さらに会議のテーブルに座る人の集まりへと意味が拡がり、'a board of directors' (理事会)、'a board of education' (教育委員会)、'a board of trade' (商工会議所) などの表現にも使われ、今日のような多義語としての意味のネットワークが形成されたと考えられる。

以下の本稿では、まず日常のコミュニケーションで特に多用される英語の基本動詞 16 語を対象に、意味の上で互いに対立する語や関連する語を 8 群に分類して、各語の輪郭となる包括的意味を示す語彙スキーマとその周辺的意味に至る転化・派生の過程を明らかにする。つぎにこれらの基本動詞と共に多用される方位語のうち約 30 語を対象に、互いに対立する意味を有する 8 群の語と類似の意味を共有する 6 群の語の用法上の相違点を明らかにし、簡潔にまとめる。

●基本動詞の語彙スキーマ

1.1. Be vs. Have

[存在] 対 [所有]

「存在」を意味する英語の語彙のうち最も代表的で有用性の高い語が 'Be' で、人称によって am/are/is と変化し、過去形は was/were に、過去分詞形は been となる。この動詞には、本来「～デアル」という連結関係を表わすコピュラ (連結詞) の意味はなかった。これは、おそらく「存在」の 'Be' が、たとえば、“I am (as) a man on this land.” (私はこの土地の者として存在する) から意味が転化して “I am a man on this land.” (私はこの土地の者だ) のようなプロセスを経て、この意味が派生したものと考えられる。その結果、'Be' の語彙スキーマ [存在] には「存在」→「連結関係」の二つの意味クラスが生じた。また、その用法にも無意志と有意志の二通りがある。「存在」を表現する場合は、無意志なら「～がある、～に居る、～になる」の意味となり、有意志ならば「行く、来る」の意味となる。以下にこれらの例を見てみよう。

- 1.1.1. You are a good judge of men.
(あなたは男を見る目がある。)
- 1.1.2. Your shoes are caked with earth.
(君の靴には泥がこびり付いて居るよ。)
- 1.1.3. It is disgusting to see a dead cat on the road.
(路面に猫が死んでいるのを見るのはいやな感じだ。)
- 1.1.4. Mr. Shima is away in Osaka on business.
(鳥さんは出張で大阪に行っています。)
- 1.1.5. Somebody is at the back door.
(誰か裏口に来てますよ。)

また、「連結関係」を述べる場合、無意志であれば「～である、～することになっている」の意味になり、有意志であれば、「～にふるまう、～にする」の意味となり、その一部は助動詞化し、この語の意味のネットワークを作っている。

- 1.1.6. Jiro is a dog hater.
(次郎は犬が嫌いだ。)

1.1.7. The attack was timed to take the government army by surprise.

(その襲撃は政府軍の不意を突く仕組になっていた。)

1.1.8. Be good, and you'll be quite safe.

(おとなしくしろ！ 危害は加えんから。)

1.1.9. Be a good boy. (大人しくしてなさい。)

		Be動詞の語彙スキーマ [存在]	
		存在	連結関係
無意志	～にある (存在する)	～である ～になる ～することになっている →助動詞化	
	～に居る		
有意志	行く 来る	～にふるまう ～にする →助動詞化	

(注) ▶印は右方への意味変化の推移を表わす。

他方、「所有」を意味する語のうち最も代表的で有用性の高い語が 'Have' である。'Have' の語彙スキーマ [所有] は、「所持」→「経験」→「獲得」の順に意味が転化派生した。無意志で用いられる場合には、「所持」の意では、「～を持っている、～される、～してもらう」となり、一部は助動詞化して「完了」の「～の状態を持っている→～の状態になる」の意を表わす。これを以下の例で見てみよう。

1.1.10. The man had a gun on him.

(その男は拳銃を所持していた。)

1.1.11. Japan has the sea round it.

(日本は四面海に囲まれている)

1.1.12. You'd better have your eyes tested.

(君は目を検査してもらった方がいい。)

また、「経験」の意では、文字通り「～を経験する」となる。「獲得」の意では「～される」となり、有意志では、「受け取る、食べる、飲む、する、させる、してもらう」などの意味が分化し、現在のような意味のネットワークを形成したと考えられる。

1.1.13. I had a strange experience the other day.
(最近奇妙なことを経験した。)

1.1.14. Let's have a drink on our way back.
(帰りに一杯やりましょうや。)

1.1.15. I sometimes have an impulse to let off steam.
(僕は時折物凄くうさ晴らしをしたくなることがある。)

ところで、つぎの例に見られるように、「所有」の意味を英語では「～をモツ」と表現するが、日本語は「～がアル」と表現する。

- (1) a. I've got a lighter.
b. ライターがあります。
c. Have you had any teeth pulled?
d. 歯を抜いたことがありますか。

1.2. Make vs. Do

[生成] 対 [行為]

'Make' の原義は、「ある物を生ぜしめる」であるから、その語彙スキーマは [生成] である。これから、「創造 (ある動作、状態を生ぜしめる)」の意が転化して「使役」の意味が生じ、さらにその結果に視点が移り、「結果」の意味が生じたと考えられる。さらに、「創造」の場合は「～を作る、～を料理する、～を準備する」の意味が分化し、さらに「(物1) から (物2) を作る、～を解釈する、～を考える」の意味が分化し、「(努力し

		Haveの語彙スキーマ [所有]		
		所持	経験	獲得
無意志	持っている	(性質・感情を) 経験する	～させる (してもらう)	
	される (してもらう) →助動詞化 (完了)			
有意志			受け取る 食べる 飲む する	

Makeの語彙スキーマ [生成]			
	創造	使役	結果
派生	(物)をつくる 料理をする 準備する (物 ₁)から(物 ₂)をつくる 解釈する 考える (努力して)作り上げる (目標を)成し遂げる (金を)稼ぐ (ある行動)を行う, 成す	(ある動作を)させる (人がある状態に)させる (人がある状態に)する	(努力して) ~になる (自然に) ~になる, 達する

て) ~を作り上げる, (目標)を成し遂げる, (金)を稼ぐ」とか, 「(ある行動)を行なう」などの意味が生じた。また, 「使役」の場合は, 「(ある動作)をさせる, (人がある状態)にさせる (する)」などの意味が分化し, 「結果」の場合は, 「(努力して) ~になる, (自然に) ~になる, ~に達する」などの意味が分化し, 今日のような意味のネットワークになった。

他方, 'Do' の原義は「ある行為をする」であるから, この語彙スキーマは, 「行為」である。これから, 他動詞では, 「(ある事)をする, (ある物)をもたらす」とか, 「(人)に手を加える」などの意味が派生し, その一部は助動詞化した。また, 自動詞では「(役割)を果たす, (物)に満足できる, (物)が十分である」などの意味が派生し, その一部は代動詞になり, この語の意味のネットワークになった。

Doの語彙スキーマ [行為]	
行為	
他動詞	自動詞
~ (事)をする	(役割を)果す
~ (物)をもたらす	(物に)満足できる
~ (人)に手を加える	(物が)十分である
→助動詞 (疑問, 否定, 強調)	→助動詞 (代動詞)

1.3. Give vs. Take

[授与] 対 [受領]

'Give'の原義は「物を人に授け与える」である。したがって, この語彙スキーマは「授与」である。

さらに, 他動詞の場合は, 無意志ならば, 「~をもたらす」の意味から, 「(ある行為)をする, される」とか「(病気)をうつす」などの意味が分化した。また, 有意志ならば, 「(ある物)を差し出す, 渡す, 預ける, 支払う, 売る」の意味から, 「(ある事)を述べる, 伝える」の意味が分化し, さらに「(ある行為)を行なう, する」となり, 「(会などを)を催す, 開く」とか, 「(声)を発する, 歌う」などの意味が分化した。さらに自動詞の場合, 「つぶれる, たわむ, 屈する」などの意味が分化し, 今日のような'Give'のネットワークを形成したと考えられる。

Giveの語彙スキーマ [授与]		
授与		
	他動詞	自動詞
無意志	~をもたらす ~を生じさせる なされる する (病気を)うつす	(物を)与える たわむ つぶれる 屈する
有意志	(物事)を与える を渡す 支払う 述べる, 伝える 行う, (音声を)発する 開催する (動作)を加える	

他方, 'Take'の語彙スキーマは, 「ある物を手に受け取る」, すなわち「受領」である。これから転化して, 「必要」→「取得」→「移動」→「受

Takeの語彙スキーマ [受領]			
	必要	獲得	移動
無意志	(時間, 労力)がかかる (場所)をとる		
有意志		~を手にとる ~を受け取る ~を奪う ~を選ぶ ~を着る ~を買う ~を飲む	~を持って行く (人)を連れて行く
			~を引き受ける (地位)につく

「諾」の意味が生じ、この語の意味のネットワークがつくられた。「必要」は、無意志で用いられ、「(時間, 労力)がかかる」とか「(場所)を取る」の意味を表わす。他の三者は全て有意志で用いられる。「取得」では「~を手にとる」から、「~を受け取る, 奪う, 選ぶ, 買う」とか、「~を着る, 飲む」などの意味が分化した。また、「移動」の場合は、「(物)を持って行く, (人)を連れて行く」の意味となり、「受諾」の場合は、「(役)を引き受ける」とか「(ある地位)に就く」などの意味が分化した。この語は多様な意味をもつという点で 'Get' と似ているが, 'Get' が常に「何らかの労力」を前提とするニュアンスがあるのに対し, この語のコアは, 専ら「取捨選択」にあり, 比較的スピーチ・レベルの高い語である。

1.4. Put vs. Get

[設定] 対 [取得]

'Put'の語彙スキーマは, [設定: (ある物)を(ある場所)に位置づける]である。これから, 「設置」→「負荷」→「調整」→「発着」の意味が転化派生して意味のネットワークをつくった。前三者は他動詞で, 他は自動詞である。「設置」の場合は, 「(物)を~に置く」から, 「(物)を持っていく, (人)を連れていく」となり, さらに「(値)を付ける」とか, 「(服)を身につける」とか, 「(言葉)で言い表わす, 翻訳する」, 「(物)を投げる, を注ぐ」などの意味が分化した。また, 「負荷」では, 「(責任, 税など)を課す, ~のせいにする」とか, 「評価する, (問題など)を提案する」, 「(苦痛, 仕事など)を受けさせる」などの意味が分化した。さらに, 物事の「調整」の意味では, 「(~の状態)にする」とか, 「(時刻を)

Putの語彙スキーマ [設定]			
他動詞			
設置	負荷	調整	発着
(物)を置く ~にのせる ~に入れる ~から出す (値)を付ける (服)を身につける (言葉)で言い表す (物)を投げる を注ぐ	(責任, 税など)を課す (問題など)を提案する (苦痛, 仕事など)を受けさせる 翻訳する	(~の状態)にする (時刻を)調整する	(人, 船が)立ち寄る (急に)立ち寄る

調整する、延期する」などの意味が分化した。最後に、自動詞で用いられる「発着」の意味では、「(船が) 立ち寄る」、「(急に) 立ち去る」などの意味が分化した。

他方、'Get' の語彙スキーマは、「取得（なんとかしてある目標物を手に入れる）」であり、この意味が転化して「獲得」→「習得」→「結果」の三つのクラスが生じ、この語の意味のネットワークになったと考えられる。すなわち、「獲得」の場合は、無意志なら「～を手に入れる、受け取る」の意味で用いられ、有意志なら「(物) を得る、買う」の意味から、「(ある場所に、物) を持ってくる、(人) を連れてくる」の意味で用いられる。「習得」の場合は無意志なら、「～がわかる、頭に入る」の意となり、有意志では「～を理解する、習得する」の意味になる。さらに、「結果」の場合は、無意志なら「(ある状態) になる」とか、「(ある場所) に着く、行く」の意味で用いられ、有意志の場合は、「(ある状態) にする」の意味で用いられる。この語を使えば、親密感やくだけた雰囲気の効果が出る反面、この語はあくまでも親

しい間柄の者同士で日常的に用いられる砕けた語 (informal/casual words) であり、あらたまった正式な場面での使用には不適切とされている。

1.5. Come vs. Go

[接近] 対 [分離]

'Come' の語彙スキーマは、「(人が相手の処に) 近づく」である。これから「接近」→「発生」→「結果」の順に意味が転化し、さまざまな意味のネットワークをつくったと考えられる。「接近」の場合は、無意志なら「～から出てくる」とか「～するようになる」の意で用いられるが、有意志ならば、「(人が) 来る、着く、行く」とか、「(物が) 届く、達する」、あるいは「(事が) 到来する」の意味になる。「発生」の場合は、無意志のみで用いられ「生じる、起こる、現われる、浮かぶ」などの意味になる。「結果」の場合も無意志だけで、「(ある状態) になる、なってくる」の意となる。

これに対して、'Go' の語彙スキーマは、「(人が相手から) 分かれて行く」である。これから「分

		Getの語彙スキーマ [取得]		
		獲得	習得	結果
無意志	手に入れる 受け取る	わかる 頭に入れる	(ある状態) になる (ある場所) に着く に行く (ある行為) をされる	
	(物) を得る を買う (相手の命) を獲える→をやっつける (ある場所に) 持ってくる 連絡する (心) を獲える→に感動する	理解する 習得する	(ある状態) になる (ある行為) をし始める	

		Comeの語彙スキーマ [接近]		
		接近	発生	結果
無意志	出てくる ～するようになる	生じる、浮かぶ 起こる 現れる	[ある状態] になる ～になってくる	
	[人が] 来る、行く、着く [物が] 達する、届く [事が] 到来する			

「分離」→「結果」の意味に転化して今日のような意味のネットワークになったと考えられる。さらに、「分離」の場合、有意志ならば、「行く、進む、出発する」の意味から「(授業に)出る」とか、「(作業を)しに行く」などの意味が分化し、無意志ならば、「(物事が)進行する」、「機械が動く」、「(音)を出す、が鳴る」などの意味で用いられる。また、「結果」の場合、有意志ならば「(ある状態)のままている、のままである」の意味となり、無意志の場合は、「(好ましくない状態)になる」、「(物事が)なくなる、過ぎ去る、至る、届く」などの意味が分化したと考えられる。

1.6. Let vs. Keep
[放任] 対 [管理]

‘Let’の語彙スキーマは、[放任(人や物があるがままにさせておく)]である。これから「許可」「使役」→「勧誘」→「仮定」の順に意味が転化派生して‘Let’の意味のネットワークが形成されたと考えられる。「許可」の場合は、「～させてやる、(ある行為)を許す」から「(人、物を～の状態)にさせる」となり、さらに「(金と交換で解放して)土地、家の管理権を貸す」などの意味が分化

し、一部は自動詞化した。また、「使役」の場合は、「(ある事)をさせる」から、「(人に仕事)を請け負わせる」の意が分化した。また、「勧誘」や「仮定」の場合は、命令文で「～しよう、しようじゃないか」とか、「～と仮定せよ」の意味になる。

これに対して、‘Keep’の語彙スキーマは、「(自己の物として人、物、位置、状態など)を守り続ける」、すなわち「管理」である。これから、まず「保有」→「維持」の転化が生じ、さらに「保有」はその期間の長短により、「保存」と「保管」に分化して意味のネットワークを形成した。すなわち、長期の「保存」の場合は、「保存する」から「(約束など)を守る」とか、「(家族)を養う、(動物)を飼育する、(人)を雇う、留置する」とか、「(店)を経営する」、さらに「(日記)をつける」などの意味が分化した。また、短期の「保管」の場合は、「(物)を取っておく、預ける、貸す」などの意味になる。他方、「維持」の場合は、「(物、事がある状態)にしておく」という意味から、「～し続けさせる」とか、「絶えず～させる」などの他動詞の意味が分化した。これから自動詞の意味が派生し、「(ある状態)がずっと～のまま

Goの語彙スキーマ [分離]		
	分離	結果
無意志	[物事が] 進行する [機械が] 動く	[好ましくない状態] になる [物, 事が] なくなる 過ぎ去る
有意志	[音を] 出す, 鳴る 行く, 進む, 出発する [授業に] 出る [作業を] しに行く	[物, 事が] 至る, 届く [ある状態] のままている のままである

Letの語彙スキーマ [放任]			
許可	使役	勧誘	仮定
①～させてやる ～することを許す ⑤(人, 物を～の 状態に) させる ⑥(土地, 家の管理 権を金と交換で解放 して) 貸す	②～させる ～(の状態に) させる ⑦人に(仕事を) 請負わせる	③～しよう ～しようじゃないか	④～と仮定せよ

Keepの語彙スキーマ [管理]		
保有 (vt)		維持 (vi)
保存 (長期)	保管 (短期)	
保存する (家族) を養う (動物) を飼育する (店) を経営する (人) を雇う, 留置する (約束) を守る (日記) をつける	保管する 預ける 貸す 取っておく	[人・事・物が] ~しつづける [物が] もつ [ある状態が] ~のままである ~しないている

である」とか、「(物が) もつ」とか、「(人がある場所に) 留まる」, 及び「~しないている」などの意味が分化したと考えられる。

1.7. See vs. Seem

[認識] 対 [推定]

‘See’の語彙スキーマは、「(物, 事の様子) が視野に入る」, すなわち「認識」, 及びその結果「思い巡らすこと」, すなわち「認識」である。これから、「認識」→「理解」→「経験」→「判断」「確認」へと順に転化して意味のネットワークをつくり上げたと考えられる。「認識」~「経験」の意味クラスは、この語が無意志で用いられる場合である。「認識」では、「(物, 人) が見える, (見て) 知る」の意味で用いられ、「理解」, 「経験」では、「(読んで, 見て, 考えて) わかる」, 「経験する」の意味で用いられる。他方、有意志の意味

クラスは、「認識」, 「判断」, 「確認」である。有意志の「認識」では、「(物) を見物する, 見届ける」とか、「(人) を見る, に会う」とか、「(人) を送り届ける」などの意味が派生した。「判断」の場合は、「~を診断する, ~を見てもらう」とか、「~を調べる」とか、「~を考える, ~を想像する, ~を予測する」の意味が派生した。また、この最後の意味から、‘seem’の語が誕生した。「確認」の場合は、「~を確かめる, ~に気をつける」とか、「~に配慮する」とか、「~を黙認する」などの意味に分化した。

Seemの語彙スキーマ [推量]
~のように思われる
~したようである
~したらしい
~であるらしい

Seeの語彙スキーマ [認識]			
	認識	理解	経験
無意志	(物が) 見える (人が) 見える (見て) 知る	(読んで) わかる (見て) わかる (考えて) わかる	経験する
	認識	判断	確認
有意志	(物) を見物する 見届ける (人が) 見る ~に会う (人) を送り届ける	[~を診断する ~を診てもらう ~を考える ~を想像する 予測する ~を調べる]	~を黙認する ~を確かめる ~に気を付ける ~に配慮する

一方、'Seem' の語彙スキーマは、[推定 (～のように見える)] である。これから、「～のように思われる」とか、「～であるらしい」とか、「～したらしい (ようである)」などの意味が転化派生した。

1.8. Say vs. Send

[伝達] 対 [移送]

'Say' の語彙スキーマは、[伝達 (言葉を発して情報を伝える)] である。これから「発言」「報道」→「仮定」の順に意味が転化派生して、意味のネットワークを形成したと考えられる。まず、「発言」の場合は、「～と言う」の意から「意見を述べる」とか、「(祈りなど) を唱える」などの意味が分化した。「報道」の場合は、「(世間の人々が) ～と噂している」から「(メディアが) ～と言っている」とか、「(時計が時間) を示している」、あるいは「(物が) ～を暗示している」などの意味が分化した。「仮定」の場合は、「仮に～としたら」とか、「言ってみれば」、「おおよそ」などの意味に分化した。

他方、'Send' の語彙スキーマは、「移送 (人、物がある場所に送る)」である。これから「発送」

「派遣」→「放出」→「結果」などの意味に転化派生し、今日のようなネットワークをつくりあげた。「発送」の場合は、「(物や伝言) を送る、発信する」となり、「派遣」の場合は、「(人) を派遣する」となり、「放出」の場合は「(草木が芽、葉、枝など) を出す」となる。「結果」の場合は、「(人、物がある状態) にする、させる」とか、「(神への祈りで) ～を (ある状態) にせしめ給え」という意味が分化したと考えられる。

●方位語の語彙スキーマ

「方位語」とは、いわゆる前置詞、副詞に相当するカテゴリーであるが、本稿では、そのようなラテン語文法を踏襲した従来の形式文法の名称を避けて、英語本来の各々の語の働きに着目した機能的分類カテゴリーを使用する。

2.1. Before vs. After (Behind)

[前] 対 [後]

'Before' の原義は、「(ある物) の前に」という空間的位置であった。したがって、その語彙スキーマは [前] である。現在では、「空間的位置」を示す場合は、「in front of」を用いるが、この語彙

Sayの語彙スキーマ [伝達]		
発言	報道	仮定
～と言う 意見を述べる (祈りなどを) 唱える	(iii) (時計が時間) を示している ～を表している (ii) (メディアが) ～と言っている (iv) (物が) ～を暗示している (i) (世間の人々が) ～と噂している ～と言う	仮に～としたら 言ってみれば おおよそ

Sendの語彙スキーマ [移送]			
発送	派遣	放出	結果
(物、伝言) を発送する	(人) を派遣する	(香・光・熱・煙など) を放つ (草木が) 芽、葉枝などを出す (神への祈りで人) を～の状態にせしめ給え (人、物) をある状態にする、させる	の状態にせしめる

スキーマが転化して「～よりも先に、～しないうちに」という時間的關係を表わす意味になり、さらに「(選択, 優先の)～よりむしろ、～より勝って」などの意味が分化し、この語の意味のネットワークをつくったと考えられる。なお、この語を空間的位置を示すために用いられれば、文語調の堅い感じになる。

逆に、'After'の語彙スキーマは、「(ある物)の後に」という空間的位置の[後]を表す。この意味が転化して、時間的な順序を表す「～の後に」→「～の結果」→「(目的・追求の)～を追って、～を求めて」→「(順応, 模倣の)～にならって、～にちなんで」→「(関連の)～について」などの意味が派生し、今日のような意味のネットワークとなった。現在では、この語は、空間的・時間的位置を示すために用いられる。これに対して、'Behind'は、専ら物の前後關係を示すために用いられ、'After'のように動作との関連で、目的・追求の意味に用いられることはない。

2.2. For vs. Against

[賛成] 対 [反対]

'For'の原義は「fore(前に)」であり、目の前にある対象に対して抱く[好意]を暗示した。この好意の対象に対する運動は支持であり、賛成となる。したがって、この語の語彙スキーマは、[賛成]である。これから[目的]→[交換][理由]→[関連]→[範囲]などのカテゴリーが転化派生し、今日の意味のネットワークを作り上げたと考えられる。さらに、[賛成]の場合は、「～のために」、「(手紙や電話で)～宛ての」とか、「～に味方して」、「～を記念して」などの意味が分化した。[目的]の場合は、「～を求めて」とか、「(ある場所)に向かって」、「～に備えて」などの意味が分化した。[交換]の場合は、「～の代わりに」とか、「～と交換で」、「(特性, 資格)として」などの意味が分化した。[理由]の場合は、「～のために」とか、「～にもかかわらず」などの意味になった。さらに、[関連]では「～に關した」とか、「～に適した」、「～の割りには」、及び不定詞の意味上の主語を示す用法が分化した。また、[範囲]では、「(距離)～にわたって」、「(期間)

～の間に」とか、「(ある決まった日時)に」などの意味が分化した。なお、「期間」の意味の類似語として'During'がある。この語は、「(特定の期間)の内のいつか」を意味するのに対して、'For'は「(一般的な期間)のワク」に対して用いられる。

他方、'Against'の原義は、「互いに向かい合っ て対立する相手に対して抱く敵意であり、その行為」である。したがって、この語彙スキーマは、[反対]である。これから[圧迫]→[防御][対照]→[不利益]などのカテゴリーに転化派生して、今日のような意味のネットワークをつくりあげたと考えられる。[反対]の場合は「～に逆らって」となり、[圧迫]の場合は「～にもたれて」とか、「～にぶつかって」の意味となり、さらに[防御]の場合は「～に備えて、～しないように」などの意味になり、[対照]の場合は「～を背景にして」の意味で、[不利益]の場合は「～に不利な」の意味で用いられる。

2.3. From vs. To (Toward)

[起点] 対 [終点]

'From'の原義は、「そこを離れて(away the place)」であるから、この語の語彙スキーマは、行動の[出発点, 起点]である。これから場所→時間→順序→階級→価格→起源→推移→原料→原因→根拠→免除→分離→制止→相違などの起点を示す「～から」の用法が順に派生して意味のネットワークを形成するに至ったと考えられる。なお、「～から」という類似の意味を持つ方位語にOut ofがあるが、この場合は[起点]ではなく、必ず「内から外へ」の意味で用いられる。また、「～から作られる」という意味に対応する英語に、'be made of'と'be made from'があるが、前者は材料が原形を留めている場合であり、後者は材料が原形を留めない場合に用いる。

一方、'To'の語彙スキーマは、「終点(<ある人, 物>が<ある場所, 動作, 状態>に到達する点)」である。これから、[方向]→[範囲]→[目的][結果]→[結合]→[比較]→[対立]→[関連]、及び不定詞の用法などに転化派生し、意味のネットワークを形成した。[方向]の場合は、

「～の方へ」「～まで」「(動作対象)へ、に」「～にとって」などの意味が分化した。[範囲]の場合は、「～に至るまで」とか、「～の限りでは」などの意味になる。[目的]の場合は、「～のために」となり、[結果]の場合は、「～になるまで」とか、「(感情名詞)したことには」などの意味になる。また、[結合]の場合は、「～に付けて」とか、「～に加えて」とか、「～に応じて」とか、「～に含まれている」などの意味が分化した。[比較]→[対立]→[関連]の場合は、それぞれ「～と比べて」、「～に対して」、「～について」などの意味が分化した。なお、不定詞の用法は「(<対象をある動作・状態>の方向に持って行く)コト、タメノ、タメニ、ナラバ」という意味が定着したものである。他方、'Toward'の語彙スキーマは[方向]であり、'To'のように[終点]の意味を含まない点が異なる。

2.4. In vs. Out

[内] 対 [外]

'In'の語彙スキーマは、[内(ある囲われた場所の内部)]である。これから、「(位置)～の中に」→「(運動)～の方角に」→「(状態)～の状態で」→「(活動)～に携わって」→「(着用)～を身に付けて」→「(範囲)～には」→「(限定)～の点で」→「(部類)～で」→「(期間)～の間に」→「(手段)～で」→「(様態)～で」→「(形状)～となって」→「(数量)～で、～につき」→「(原因)～のため」などの意味が派生し、今日のような'in'の意味のネットワークをつくりあげている。

他方、'Out'の語彙スキーマは、[外(ある囲われた場所の外部)]である。これから、「(活動)方向」→「生成」→「異常」→「停止」→「完了」などのカテゴリーが派生した。「方向」の場合は、「～に出かけて」、「～を突き出して、広げて」、「～を選び出して」、「～を貸し出して」、「～を追い出して」、「(仕事)を休んで」などの意味が分化した。「生成」の場合は、「(花)が咲いて、(事)が起って」とか、「(本)が出版されて、(秘密)が漏れて」、「(大声)で」などの意味が分化した。「異常」の場合は、「(調子)が狂って」とか、「(常態)を失って」とか、「(案)が駄目になって」

などの意味が分化した。「停止」の場合は、「(機能)が駄目になって」、「(物、期限)がなくなるとか」、「(流行)が廃れて」、「(書類)が処理済みで」などの意味が分化した。「完了」の場合は、「最後まで、徹底的に」などの意味になる。

2.5. Into vs. Out of

[の内へ] 対 [の内から]

'Into'の語彙スキーマは、[(ある囲われた場所の内部へ向かう運動)～の内へ]である。これから「(空間、時間、状態など)の中に」とか、「(変化、結果)となって」とか、「(衝突)にぶつかって」、さらに「(数)を割って」とか、「(物、事)に熱中して」などの意味が分化し、この語の意味のネットワークをつくりあげた。

他方、'Out of'の語彙スキーマは、[(ある囲われた場所から外部に向かう運動)～の内から]である。これから「～から離れて」、「(割合)のうちで」とか、「(ある原因)から」、「(ある範囲)の届かないところに」とか、「(ある状態)を離れて」、「(物が一時的に)不足して」とか、「(ある材料)を使って」、「(ある供給源)から」、さらに「(結果)～を奪って」、「(試合に)負けて」などの意味が分化して、今日の'Out of'のネットワークを構成するに至った。

2.6. On vs. Off

[接触] 対 [分離]

'On'の語彙スキーマは、[ある物が何かの面に(接触)している状態]を意味する。これから、「(従事)→「近接」→「支持」→「関連」→「機会」などのカテゴリーが転化・派生し、この語の意味のネットワークを形成したと考えられる。「従事」の場合は、「(位置)～の上の(で)」、「(附着)～にくっ付いて」とか、「(着用)～をつけて」、「(所属)～で働いて」とか、「(目的)～中で」、「(状態)～中で」、さらに「(反復)に加えて」などの意味が分化した。「近接」の場合は、「(位置が)～に接して」とか、「(時間、価格、重量)がほぼ～だ」などの意味になる。「支持」の場合は、「(支点)～を支点にして」とか、「(根拠)～に基づいて」とか、「(手段)～によって」など

の意味が派生した。[関連] の場合は、「(動作対象) に向かって」、「(専門) ~について」とか、「(不利益) ~を見限って」、「(負担) ~の奢りで」などの意味が派生した。また、[機会] の場合は、「(特定の日時) に」の意味に限って用いる。これに対して、「Off」の語彙スキーマは、あるものから離れて [分離] した状態である。これから「(位置) ~から離れて」、「(基準) からそれて」とか、「(運動) ~を去って」、「(仕事) を休んで」とか、「(離脱) ~をはずして」、「(分割) を分けて」とか、「(減少) ~が減って」、「(根源) から」、さらに「(停止) ~が止まって、~を差し控えて」とか、「(強調) すっかり」、「(依存) ~に頼って」などの意味が派生し、「Off」の意味のネットワークを作り上げた。

2.7. Over vs. Under

[上位] 対 [下位]

‘Over’ の語彙スキーマは、[(対象から離れてその真上を覆う位置) 上位] である。これから、[上位] → [超過] → [期間] → [従事] → [関連] → [経過] → [手段] → [反復] などのカテゴリーが転化・派生し、この語の意味のネットワークを形成した。「上位」の場合は、「~に張り出して」、「一面に、つまづいて」、「~の向こう側に」などの意味が分化した。また、「超過」の場合は、「(数量, 程度が) より多く」、「(音が) より大きく」とか、「(地位が) より上で」、「~を支配して」とか、「~に優先して、譲って」などの意味が分化した。また、「期間」の場合は、「(あまり長くない特定の時期) ~にわたって」の意である。さらに、「従事」の場合は、「(仕事など) をしながら」を意味する。但し、この場合は動名詞と共に用いることは不可である。「関連」の場合は、「~をめぐって」の意となり、「経過」の場合は、「はじめから終わりまで」の意である。「手段」の場合は、「(電話, ラジオなど) によって」の意となり、「反復」の場合は、「もう一度」の意味になった。

これに対して、「Under」の語彙スキーマは、[対象の真下に広がっている位置空間) 下位] である。これから、[下位] → [拘束] → [従属] → [包

含] などのカテゴリーが転化・派生し、「Under」の意味のネットワークをつくっている。「下位」の場合は、「~のふもとに」とか、「~の下に」などの意味から、さらに「(数量) ~未満で」とか、「(価値) より下で」の意となる。「拘束」の場合は、「~を背負って、~を受けて」とか、「~のために」などの意味になる。「従属」の場合は、「~のもとで」とか、「~中で」などの意味となる。さらに、「包含」の場合は「~のもとで」、「~のもとに」とか、「~に基づいて」、「~の中に」などの意味が分化したと考えられる。

2.8. Up vs. Down

[上方・接近] 対 [下方・分離]

‘Up’の語彙スキーマは、[(上方への運動、及び心理的に接近するニュアンス) したがって、上方・接近] である。これから [上方] → [接近] [熟知] → [合計] → [停止] → [固定] → [完成] → [分割] などのカテゴリーに転化派生し、今日のような意味のネットワークになった。すなわち、「上方」の場合は、「上方へ」から「(人が) 起きて」、「(家が) 建って」とか、「(物, 事が) 出現して」、「(価値, 音量が) 上がって」、さらに、「(活気が) 高まって」などの意味が分化したと考えられる。その後、「上に」とか、「(時間が) 尽きて」とか、「(会が) 終わって」などの意味が分化し、さらに「風上へ」、「中心地へ」とか、「上流へ」、「大学へ」などの意味が派生した。「接近」の場合は、「~の方へ」とか、「遅れないで」などの意味になる。「熟知」の場合は、「~に精通して」の意味になり、「合計」の場合は、「~を積み上げて、寄せ集めて」の意味になる。また、「停止」の場合は、「止まって、貯えて」の意味になり、「固定」の場合は、「~をふさいで、閉じて」の意味になる。さらに、「完成」の場合は、「~し尽くして、~し果して」の意味となり、「分割」の場合は、「(ばらばらの状態) に」の意味になった。

これとは逆に、「Down」の語彙スキーマは、[(下方への運動、及び心理的に遠ざかるニュアンス) したがって、下方・分離] である。これから、[下方] → [分離] → [時間] → [順位] → [事務] → [予定] → [命令] → [勝負] → [抑圧]

[縮小] → [停止] → [強意] などのカテゴリーへと転化し、この語の意味のネットワークを形成した。まず、「下方」の場合は、「下へ」から「下がって」という意味になり、その後、「下に」とか「(人が) 寝込んで、衰えて」の意味に分化した。さらに、「分離」の場合は、「風下へ」とか、「地方へ」とか、「(大学から) 戻ってきて」などの意味になった。また、「時間」の場合は、「(過去から) 後代に」の意味となり、「順位」の場合は、「～に至るまで」の意。また、「事務」の場合は、「書き留めて」とか、「頭金として」とか、「(残高が) 不足して」などの意味に分化した。「予定」の場合は、「(会が) 予定されて」の意味になる。「命令」の場合は、「座れ!」とか、「降ろせ!」の意味で用いられる。「勝負」の場合は、「負け越して」の意味になる。「抑圧」の場合は、「押さえ付けて」の意味になり、「縮小」の場合は、「減じて、薄めて」の意味に、また、「停止」の場合は、「止めて」の意味になり、「強意」の場合は、「最後まで、すっきり」などの意味になる。

2.9. About · Of · On · With [関連] · [関連] · [関連] · [関連]

'About, Of, On, With' の4語は、いずれも「～について、～に関して」という意味を有する。しかしながら、これらの語彙の間には微妙なニュアンスの違いがある。たとえば、“She spoke about her family.” の例において、'about' は「一般的な内容に詳しく」関連する場合であるが、'of' とすれば、「その内容に軽く触れた程度に」といった意味になる。また、“a book on teas” の場合、'on' は「専門的な内容を扱った」という含みを表している。さらに、“What do you want with me?” の場合の 'with' は、話し手と聞き手の「両者の間柄に関して」という意味である。'About' の原義は、「ある物のまわりに位置して」であるから、その語彙スキーマは、[周辺] である。これから、「位置」→「関連」→「概略」→「従事」→「近接未来」などのカテゴリーが転化・派生して、この語の意味のネットワークになった。「位置」の場合は、「～のまわりに」とか、「～のあちらこちらに」とか、「～の辺りで」などの意味が分化した。「関

連」の場合は、「～を携帯して」とか、「(there is 構文で) どこか～な雰囲気がある」とか、「～に関する」などの意味に分化した。「概略」の場合は、「およそ、約」という意味で副詞化した。「従事」の場合は、「(be about ～で) ～に従事している」の意となる。「近接未来」は、'be (just) about to do ～' の形で用いられる。'About' の類似語に 'Around' がある(次項参照)。

'On' の原義は、「～に接して」であるから、その語彙スキーマは [接触] である。これから、[付着] → [着用] → [所属] → [進行状態] → [近接] → [支持] → [方向] → [関連] → [迷惑] → [日時] → [同時] などのカテゴリーが転化・派生して 'On' の意味のネットワークが形成された。したがって、'On' の [関連] は「～に就いて」という意味であり、多分に「接触」のニュアンスがある。

他方、'Of' の原義は「～から離れて」であるから、その語彙スキーマは [分離] である。これから「根源」→「所属」→「部分」→「関連」などのカテゴリーが転化・派生したのであるが、今日では「分離」、「根源」は 'from' を、「関連」には 'about' を用いるようになったため、'Of' は専ら「所属」や「部分」の意味に用いるようになった。今日、「分離」の場合は、「～から」の意味で成句に残っており、「根源」の場合は、「～出の」とか、「(原因) ～のため」とか、「(材料) ～で作った」とか、「(内容) ～の入った」などの意味に分化した。「所属」の場合は、「(所属) ～の」、「(所有) ～の」とか、「(性質) ～がある」、「(同格) ～という」とか、「(限定) ～についての」などの意味が派生した。「部分」の場合は、「～の中の」とか、「(単位、量、種類など) の」とか、「(時間) ～などによく」などの意味が派生した。したがって、[関連] の 'Of' は「限定」のニュアンスが残っている。その他、「(主体) の」とか、「(作者) の著した」とか、“It's [That's] very kinds of you.” などの構文における「(2重主語) が」とか、「(目的関係) ～を、への」、「(動作主) ～によって」などの意味が派生した。

'With' の原義は、「(against) 対立」であるが、互いに対立する者が「共にいる」ところから、

[随伴]の意が生じた。したがって、その語彙スキーマは、[随伴]である。その結果、「随伴」→「所有」→「手段」→「関連」などのカテゴリーに転化し、意味のネットワークを形成した。「随伴」の場合は、「(所属)～と共に、～を含めて」、「(協調)に賛成して」とか、「(同時)～につれて」、「(分離)を捨てて」などの意味が派生した。「所有」の場合は、「(管理)～をもって、～を身につけて、～に預けて」とか、「(付帯状況)～しながら」とか、「(様態)～をもって」などの意味が分化した。「手段」の場合は、「(材料)～を使って、～で」とか、「(原因)のために」などの意味になった。「関連」の場合は、「(関係)～と」とか、「(対象)～に対して」とか、「(関連)に関して」などの意味に分化した。さらに、'within'とか'without'などの語は、'with'と'in'あるいは'out'との合成語である。したがって'Within'は「共に+内に」の意から、「～の内部に」とか、「(距離, 期間)以内に」とか、「(程度)の範囲内で」などの意味になった。また、'Without'は「共に+外に」の意味から、「～を持たないで」とか、「～が無ければ」とか、「～しないように」とか、「(限界)を越えて」などの意味になったと考えられる。

2.10. Across · Along · Through

[横断] · [縦断] · [貫通]

'Across'の原義は、'a + cross', すなわち「ある物の表面を十字になるように横切って」であるから、その語彙スキーマは、[横断]である。これから「(運動)～を横切って」とか、「(位置)～の向こう側に」とか、「～と交差して」などの意味が派生した。

'Along'の原義は、「細長いものの端から端まで」となっている。それ故、その語彙スキーマは[縦断]である。これから[運動方向]の「～に沿ってずっと」とか、「～づたいに」の意味になり、さらに[位置]の「～の途中で」とか、「～のどこかで」となり、最後に[方針]の「～に従って」などの意味が派生した。

'Through'の原義は「ある物を通過すること」であるから、その語彙スキーマは、[貫通]であ

る。これから「～を通り抜けて」、「(騒音などに)かき消されないで」とか、「(場所)の至る所を」、「(経過)～の始めから終わりまで、～を終えて」、「(手段)～を通じて」、「(原因)～のために」とか、「(時)～の間じゅう、～の終わりまで」などの意味が派生し、この語の現在の意味のネットワークを構成している。

2.11. Around · About

(周囲) · (周辺)

'Around'の原義は、'a+round' (の周りを取り巻いて)であるから、その語彙スキーマは、[周囲]である。これから[円周運動]と[周辺位置]のカテゴリーに分化した。すなわち、[円周運動]の場合には、「ひと周りして」、「周りに(を)」とか、「回り道をして」、「向きを変えて」、「回して、回って」などの意味が派生した。また、[周辺位置]の場合は、「あちこちに(を)」とか、「辺りに、近くに」、「およそ、約」とか、「(人が)やって来る、(物が)出回っている」とか、「(形容詞最上級+名詞の後で)現存しているうちで」などの意味が派生し、この語のネットワークをつくり上げた。なお、同意語に'Round'があるが、現在では英米とも一般に'Around'が用いられる。'About'については、既に2.9.で論じた。

2.12. Among · Between

[多者間] · [二者間]

'Among'の原義は「ある集合の中であって」であるから、その語彙スキーマは、[多者間]である。これから「～にまじって」、「～の中でも特に際立った」、「お互いに」、「協力して」などの意味が派生した。この類似語に'amid'があるが、'among'が「同質の物の集合の中」というニュアンスがあるのに対して、'amid'は「異質の物の中」という含みで用いられる。他方、'Between'の語彙スキーマは、[二者間]である。ただし、下の例のように、対象となる二者が別個の物を同時に表現する場合は、この語を用いる。

- a. There are always at war between the countries in the Middle East.
- b. Switzerland lies between Australia, France,

Germany and Italy.

2.13. At · In

[地点] · [区域]

'At' の語彙スキーマは、[地点] である。これから [地点] → [時点] → [目標] → [存在] → [状態] → [任意] → [割合] → [様態] → [代償] → [関連] → [極限] → [原因] などのカテゴリーに転化・派生し、意味のネットワークを形成したと考えられる。[地点] の場合は、「(位置) ~で」「(起点) ~から」「(所属) ~の」などの意味に分化した。[時点] の場合は、「(時間) に」「(年齢) の時に」「(順序) で」「(回数) 回目で」などの意味に分化した。[目標] の場合は、「~を目がけて」「~をねらって」などの意味になる。[存在] の場合は、「~している」の意。[状態] の場合は、「(~の状態) で」の意味。[割合] の場合は、「(価格・速度・温度など) で」の意味になる。[様態] の場合は、「~で」の意。[代償] の場合は、「~で、~しても」の意味になる。[関連] の場合は、「~の点で」の意味。[極限] の場合は、「(+名詞) ~で、(+最上級) ~ても」の意味になる。[原因] の場合は、「~を見て、聞いて、知って」などの意味になる。他方、'In' の語彙スキーマは、すでに述べたように [内] であるが、'at' [地点] と対応する場合は、かなり広い場所

[区域] に用いられる。

2.14. By · (Un)till

[近傍] · [限度]

'By' の原義は「ある物のすぐ近くに」であるから、その語彙スキーマは、[近傍] である。動作動詞と連携で用いられることにより、これから [位置] → [通過] → [差異] → [乗除・寸法] → [単位] → [経由] → [手段] → [動作主] → [限度] → [期間] などのカテゴリーに転化・派生し、今日のような意味のネットワークを形成したと考えられる。さらに、[位置] の場合は、「~のすぐそばで」、「(方位) ~寄りの」とか、「(準拠) にもとづいて」、「(動作の主体) ~を」とか、「~に関しては」、「(誓言) ~にかけて」などの意味に分化した。[通過] の場合は、「~のそばを通過して」の意となり、[差異] の場合は、「~だけ」の意となった。[乗除・寸法] の場合は、「~を(かける)、で(割る)」の意味になる。[単位] の場合は、「~単位で」の意。[経由] の場合は、「~に立ち寄って」とか、「~を通過して」の意味となった。[手段] の場合は、「~によって、~で」の意である。[動作主] の場合、「~によって」という意味になり、[限度] の場合は、「~までに(は)」の意である。また、[期間] の場合は、「~の間に」という意味になった。

方位語の語彙スキーマ

Before (前)	vs. After (Behind) (後)	Up (上方・接近)	vs. Down (下方・疎遠)
For [賛成]	vs. Against [反対]	About · Of · On · With [関連] [関連] [関連] [関連]	
From (起点)	vs. To (Toward) (終点)	Across · Along · Through (横断) (縦断) (貫通)	
In (内)	vs. Out (外)	(A)round · About (周囲) (周辺)	
Into (の内へ)	vs. Out of (の内から)	Among · Between (多者間) (二者間)	
On (接触)	vs. Off (分離)	At · In (地点) (区域)	
Over (上位)	vs. Under (下位)	By · Before · Un(till) (近傍) (限度) (継続)	

ところで、「時間の限度」の意を示す語に、'By'の他に、'Before'と'Until'がある。このうち'By'は、「ある動作が直前に完了する時間の限度」を示すのに用いるが、'Before'は、「ある動作が漠然とその時まで完了する時間の限度」を示す。他方、'Until'は、「ある動作が継続する時間の限度」を示すのに用いられる。

要 旨

本稿の目的は、英文構成の上でとりわけ多くのバリエーションを要求される述部において多用される基本語彙（基本動詞16語＋方位語30語）に焦点を絞り、それらの多義の構造を認知意味論的に再解釈し、英文構成上の困難点を克服する上で有益な知識を提供し、よってわが国の英語教育に資することである。

本稿は二部から成る。第一部では、英語の伝達においてとりわけ多用される基本動詞16語を扱った。ここでは、意味的に対立する語を対にして1. Be vs. Have, 2. Make vs. Do, 3. Give vs. Take, 4. Put vs. Get, 5. Come vs. Go, 6. Let vs. Keep, 7. See vs. Seem, 8. Say vs. Sendに分け、各語の輪郭となる包括的な意味を示す語彙スキーマと周辺的な意味に至る転化、派生の過程を明らかにするように努めた。

第二部では、同じく英語の伝達において多用される約30の方位語を扱った。ここでも意味的に対照的な語を対にして1. Before vs. Behind, 2. For vs. Against, 3. From vs. To (Toward), 4. In vs. Out, 5. Into vs. Out of, 6. On vs. Off, 7. Over vs. Under, 8. Up vs. Downなどに分け、それらの語彙スキーマとその周辺的な意味に至る転化、派生の過程を述べた。また、互いに類似の意味を共有する語を、9. About·Of·On·With, 10. Across·Along·Through, 11. (A) round·About, 12. Among·Between, 13. At·In, 14. By·Before·(Un)tillの様に一括し、その用法上の相違点を明らかにするよう配慮した。

REFERENCES

- Brown, R. 1958. *Words and Things*. The Free Press, Glencoe, Ill.
- Carter, R. 1998. *Vocabulary*. New York: Routledge.
- Clark, E. V. 1993. *The Lexicon in Acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Coady, J. and T. Huckin 1997. *Second Language Vocabulary Acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Grice, H. P. 1967. "Logic and Conversation." (William James Lectures Delivered at Harvard University.) Cole, P. & J. L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics*. vol. 3 Speech Acts. New York: Academic Press.
- Halliday, M. A. K. 1976. *Cohesion in English*. London: Longman Group Ltd.
- Hatch, E. and C. Brown. 1995. *Vocabulary, Semantics and Language Education*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jespersen, O. 1924. *The Philosophy of Grammar*. London: George Allen & Unwin.
- Mathesius, V. 1975. *A Functional Analysis of Present Day English on a General Linguistic Basis*. J. Vachek (ed.) The Hague: Mouton.
- Ogden, C. K. 1935. *The System of Basic English*. New York: Harcourt, Brace & World.
- _____. & I. A. Richards. 1923. *The Meaning of Meaning*. London: Routledge & Kegan Paul. 石橋幸太郎訳『意味の意味』新泉社, 1967.
- Pinker, S. 1999. *Words and Rules*. New York: Basic Book.
- Singleton, D. 1999. *Exploring Mental Lexicon*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Winner, E. 1988. *The Point of Words*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wittgenstein, L. 1953. *Philosophical Investigation*. G. E. M. Anscombe and R. Rhees with an English translation by G. E. M. Anscombe, Oxford: Basil Blackwell.
- 荒木 博之 1980.『日本語から日本人を考える』東京: 朝日新聞社。
- _____. 1976.『日本人の心情論理』東京: 講談社現代新書。
- 安藤 貞雄 1986.『英語の論理・日本語の論理』東京: 大修館書店。
- 池上 嘉彦 1982.『表現構造の比較—<スル>的な言語と<ナル>的な言語—』国広哲弥(編)『日英比較講座』第4巻: 発想と表現 67-110. 東京: 大修館書店。
- _____. 1981.『「する」と「なる」の言語学』東京: 大修館書店。
- 板坂 元 1971.『日本人の論理構造』東京: 講談社現代新書。
- 影山 太郎 1996.『動詞意味論』柴谷方良・西光義弘・影山太郎(編)日英語対照研究シリーズ(5)
- _____. 1980.『日英比較: 語彙の構造』東京: 松柏社。
- 国広 哲弥 1998.『英語多義語の認知意味論的研究』『神奈川大学創立七十周年記念論文集』263-299, 横浜: 神奈川大学。

- 小西 友七 1998.『英語のしくみがわかる基本動詞24』東京: 研究社出版。
- 佐々木瑞枝 1994.『外国語としての日本語』東京: 講談社現代新書。
- 篠原 一 1968.『日本の政治風土』東京: 岩波新書。
- 田中 茂範 1990.『認知意味論: 英語動詞の多義の構造』東京: 三友社出版。
- 角田 忠信 1978.『日本人の脳』東京: 大修館書店。
- 豊田 昌倫 1991.『英語表現をみがく<動詞編>』東京: 講談社現代新書。
- 服部 四郎 1968.『英語基礎語彙の研究』東京: 三省堂。
- 牧野 成一 1980.『くりかえしの文法』東京: 大修館書店。
- 松井 力也 1999.『英文法を疑う』東京: 講談社現代新書。
- 水野 光晴 2000.『中間言語分析』東京: 開拓社。
- 八木 克正 1996.『ネイティブの直観にせまる語法研究』東京: 研究社出版。
- 和辻 哲郎 1935.『風土』東京: 岩波書店。

—The Network of Lexical Schema in English—

MIZUNO Mitsuharu

Abstract

The purpose of the present study is to contribute to the teaching of English in Japan by providing the Japanese learners with knowledge useful for overcoming their difficulties in making English sentences. In order to accomplish this purpose we focused on 16 radical verbs and 30 direction words frequently used in the predicate in which a number of variations are required in producing English sentences, and reinterpreted the meanings of those polysemic words in terms of cognitive semantics.

The present paper consists of two parts. In Part I, we dealt with 16 radical verbs frequently used among others in English communication. Here, we classified pairs of words which semantically contrasted with each other into eight sections such as ① Be vs. Have, ② Make vs. Do, ③ Give vs. Take, ④ Put vs. Get, ⑤ Come vs. Go, ⑥ Let vs. Keep, ⑦ See vs. Seem, ⑧ Say vs. Send, and made an attempt to reveal the lexical schema of each verb and, in the process, the change and derivatives from the lexical schema to the peripheral meanings.

We then dealt with about 30 direction words, namely prepositions and adverbs, in Part II. Here, we classified a pair of words semantically contrasting with each other into eight sections such as ① Before vs. After (Behind), ② For vs. Against, ③ From vs. To (Toward), ④ In vs. Out, ⑤ Into vs. Out of, ⑥ On vs. Off, ⑦ Over vs. Under, ⑧ Up vs. Down, and tried to uncover the lexical schema of each word and, in the process, the change and derivatives from the lexical schema to the peripheral meanings. In addition, we sorted a group of words sharing similar meanings with one another into six sections such as ⑨ About · Of · On · With, ⑩ Across · Along · Through, ⑪ (A)round · About, ⑫ Among · Between, ⑬ At · In, ⑭ By · Before · (Un)till, taking into consideration the revealed differences in the use of those words.

キーワード 語彙スキーマ ネットワーク 発想法